

依て吾等を啓蒙されん事を切に望むものである。(定價四圓八拾錢、中文館書店發行)〔西井〕

○樂浪 王光墓

朝鮮古蹟研究會

本書は昭和七年の秋に發掘された樂浪二古墳の調査報告であつて、これに従事された小場恒吉・樺本龜次郎兩氏の執筆に係る。

この二古墳とは貞柏里に存する第二百二十七號木槲墳即ち樂浪郡の椽であつた王光の墓と、南井里の第一百十九號石槲墳とを指すのである。

王光の墓は幸にも盜掘の厄を免れたので、その結果幾多の新事實を明かにし得て、漢代文物の知見を一層豊富ならむる點が尠らなかつたのである。今その内容に就いて二三の特記すべき點を紹介するならば、先づ封土の構成と埋葬の次第に關して精密な考慮がはられた點であらう。王光の墓に於ても、墳丘が岡陵を利用して、四角張つた形の土饅頭形を示して居る點では、舊來のものに比較して別に異例を示して居る譯ではないが、封土の構成に際して、附近のものと同じ土質が使用されて居る以外に、他所から堅き粘土が運搬されて、これを成層狀に使用して、封土の崩解を防いでゐることが今度新らしく注意されたのである。猶又死者の埋葬が二回に亘つて行はれたことを知ると共に、第二次の埋葬に於て擴穴の四壁が殆ど垂直に掘り下げられ、後に再び黄色粘土を以つて埋められてゐることが明瞭となつた。棺槨の構造も亦別に例外を示しては居ないが、その用材に就いて棺には檜を、槨には檜

を使用したことも知られた。次に出土の遺物に就いて見れば、その質量に於ては玉肝の臺や彩饅塚に對して遜色を有するのではあるが、舊來知られてゐなかつた高杯や弩臂が發見され後者の使用法の實際に就て一道の光明を與へこの他筆頭物の存在も認められ、蒙古索果淖爾出土の所謂居延の筆と稱するものと同じく東漢時代の筆の實物が兩僻遠の地に於て發見された點が異常な興味を惹く。或は從來糊斗と稱せられてゐたものが奩の中から出て、女子の化粧刷子であることが明白となり、又箭頭と稱されて居たものに就ても、蓋椽釜金具であることが確められたのである。此の他、王光の墓名の由つて來る二顆の黃楊材の木印が出土し、一顆には一面に大守掾王光之印、他面に臣光の繆篆を刻し、一顆には王光私印の四字が刻されて居る。これにより、この墳墓が樂浪郡の一屬官たる王光夫妻の墓であることが認められ、又婦人に就ても漆器の銘文から姓を番氏と稱し、その骨格から三十代で没したことまで論證されたのである。

南井里の石槲墳は既に盜掘を経たものであつて、その上半は破壊し遺物も大半を失つて居る爲、表面上若干の興味を減殺する嫌ひはあるが、その槨室の構造上、樂浪古墳に於て舊來類例を見ない石窆構造である點から、學術的研究に於て前者と同様な價值を持つて居る。即ちその墓制の系統に於ては當代盛行の塼築墳に屬するものではあるが、築成後漆喰を使用した點に於て高句麗古墳との類似が考へられ、この點から又後者の先驅をなすものたることが推定される。墓墳の作成年代に關しては副葬品にこれ明示す

るものがないので確定されぬが、曾て平壤驛構内で發掘された東
晋永和九年の在銘磚とを比較から、或は五銖錢・大泉五十等の
錢貨の出土などから東晋初期を降るものではない。以上簡略な内
容の紹介であるが猶附録として今村黑田國房野村諸氏の人骨血精
その他化學的な調査の結果が掲げられて居る。圖版九十九枚。卷
末に英文の要項を載せて居る。(菊倍版・朝鮮古蹟研究會發行、九
十部限、京都夷川寺町文星堂發賣、定價貳拾五圓)

○景印舊鈔本史記孝景本紀第十一

本書は京大文學部創設三十周年の記念出版として舊久原文庫藏
史記孝景本記を景印した卷子本である。我が國に於ける史記の古
鈔本であつて、その書寫年代の平安朝に屬するものとして今日ま
でに知られて居る限に於ては二種の系統の本がある。即ち一は高
山寺・岩崎文庫所藏の世に所謂高山寺本と稱されて居るものと、
これより更に舊いものとして知られて居る毛利公爵家藏・東北帝
國大學藏及び本書の原本の三本、所謂卜部本の系統のものであ
る。毛利公爵家藏本は呂后本紀第九であり、東北帝大本は孝文本
紀第十であり、これは孝景本紀第十一であつて、これ等は卷次に
脈絡があり、且つ體裁及び讖語等により、嘗て同一人の書寫にな
り、今日に残存した殘卷であることは何等の疑問も挾まれない。
今度景印出版に際し、那波助教授の精緻なる解説が附されて居る
が、それに據つて本書の性質價值等を明かに窺ふことが出来る。
これによればその書寫年代は今より約八百六十餘年前、平安朝中

期、後三條天皇の延久五年で、その筆者は當時漢學の名家として
知られて居た大江家の一門である大江家國である。猶本書の内容
に就て、これを汲古閣十七史本百衲本史記等と比較校勘すると傳
寫の間に於ける誤りも若干發見されるが、然しその或る部分に於
ける文句の異同に於ては司馬遷の原著に更に近いものではあるま
いかと思はれるものがある。注意すべき點は孝文帝の長公主嫫の
子嬀を隆慮侯に封じたこと、及び中三年冬(BC)に諸侯の御
史及び御史中丞の官を罷めた記事とである。此の他解説には吉澤
教授指導の下に藤枝徳三氏の調査した乎古止點並びに假名が附載
されて居る。(京大文學部發行、定價五圓五拾錢)〔以上小野〕

○東洋史研究

東洋史研究會刊

京大東洋史學科の卒業生を中心とする東洋史研究會の結果が成
つたのは一昨年初頭のことであつたが、其後同會の健やかな發展
と共に遂に機熟して、本年十月雜誌「東洋史研究」を創刊し、十二
月には續いて其の第二號を刊行した。最初その創刊にあつて、
本誌の趣旨とする所を掲げなかつた爲に、兎角の批評もあつた様
だが、要するに本誌は、東洋史學の整理清掃によつて、その進む
可き分野を明確ならしむることを標榜し、其の目的のため東洋史
學に於ける論著の批判及び紹介に最も重きを置くものであること
を、その編纂體例の實際によつて示し、又較々遲滞き乍ら、第二
號の編輯後記によつて明言した。かういふ主意の下に出發した雜
誌は、史學關係のもの、中にあつては稀れであり、殊に東洋史學